



## フクオカ・サイエンスマンス2014

九州大学 先端物質科学研究所・助教  
高田 晃彦

福岡県では、毎年、福岡県民の科学への関心を高めるために、「フクオカ・サイエンスマンス」と呼ばれる科学啓発事業を行っています。そのメインイベントは、県内で活動する研究団体・企業・NPO法人などが参加して、種々の展示・模擬実験を行う展示イベントであり、我々は、昨年度に引き続き今年度も、そのメインイベントに出展・参加しました。昨年度まで、アクロス福岡で実施されていたこのイベントは、今年からは、春日市のクローバープラザに場所を変え、平成26年11月1日(土)、2日(日)の2日間にわたって、開催されました。今年の出展は、グリーンアジア国際リーダー教育センター・エネルギー基盤技術国際教育研究センター・炭素資源国際教育研究センターの連携組織として発足した「統合創・省・基盤技術エネルギー教育研究拠点」の名前で参加しました。最終的な来場者数は、述べ6000人を超えたと発表されています。

我々は、エネルギー関連の展示「エネルギーを作る。果実で・光で・体温で発電」と石炭関連の展示「触ってみよう本物の石炭」の2つの展示・実験を行いました。エネルギー関連の展示として、身の回りにある材料で作成できる電池である「果物電池」、そして、温度差による発電「感温発電」と光による発電の「太陽発電」の簡単な説明と関連模擬実験を行いました。また、「触ってみよう本物の石炭」では、実際に触れてもらえることができる試料として、約40cm四方の大きな石炭の塊や、現在新しい天然資源供給先として話題になっているオイルシェール岩石やそこから取り出したシェールオイル、さらに種々の経年状態の石炭類などを準備し、その展示・説明を行いました。

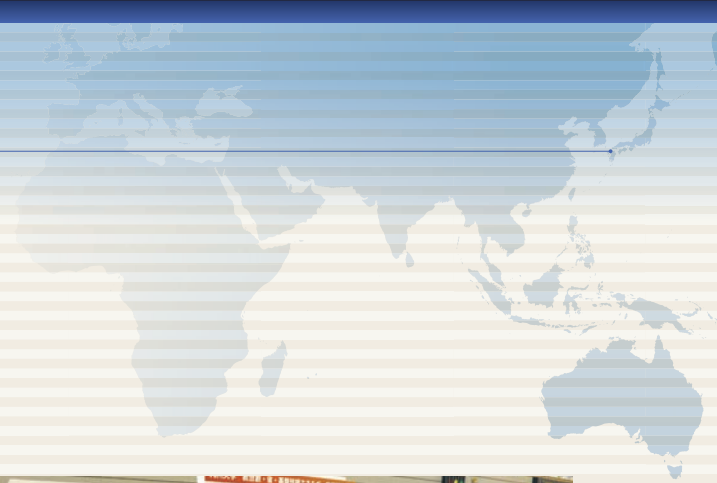
今年は、実施場所が福岡市の中心地にあるアクロス福岡から郊外の春日市クローバープラザに移ったこともあり、昨年度からは参加来客者の層が大きく変化しました。昨年度までは、街中までわざわざフクオカ・サイエンスマンスに参加すること自体を目的として来られる方が多く、さらに年齢的にも、小学校高学年から高校生を中心とした生徒が多かったのですが、今年は、比較的近所に住んでいる小学校低学年から高学年の子供たちが主な来客者となり、参加者の低年齢化が顕著にみられました。

今回の参加者の低年齢化は、参加者の興味を引く展示対象に影響を与えたように思われました。どちらかといえばアカデミックな背景をもって展示・紹介する応用物理学会・放射線学会などの学会関連団体や我々九州大学の展示に対して、科学的興味を持って来場する参加者が減少し、代わりに、工作などに興味を持つ参加者が多くなったように感じられました。そのため、科学的背景を含めた内容説明に興味を持つというよりも、表面的な現象についてのみ興味が向かうという子供たちがほとんどであり、今年のサイエンスマンスの実行に参加してもらった学生の方々が何とか科学的面白さを理解してもらおうと苦労する場面が多々みられました。

来年度以降も、春日市のクローバープラザで引き続き開催される可能性が高いことを考えると、(1)多くの児童を相手にする必要を考慮し、見た目の面白さ・わかりやすさをある程度前面に出しながら、いかにプラスアルファの説明を加えてゆけるかという点、(2)それと同時に、アカデミックな背景を持つ出展団体として、科学的バックグラウンドをしっかりと説明できる体制を維持してゆけ







るかという点を念頭に置きつつ、状況に即していずれにも対応できるような展示に改善してゆくことが、今後の我々の課題であろうと考えられます。

このような状況であったものの、我々の展示への参加者が少なかったわけではなく、非常に盛況でありました。いくつもミカンを並べて発電を行った果物電池は、それだけで目につくうえに、身の回りの物で発電が行う事ができるということで、広い範囲の参加者から興味を持たれていました。また、温度差発電では、体温による発電をAD変換しディスプレイ上に見せることにより、子供たちが発電量を競う光景がみられるなど、人が絶える時間がないほどでした。さらに、エネルギー変換の説明の一環として行っていた子供用の蛍光発光展示の蛍光塗りは、我々の予想を超えた大盛況になり、そちらの対応に多くの手を奪われてしまう事態になるほどでした。もともと幅広い年齢層にわかりやすく展示を行う事を目指していたために、我々の展示は、低学年を対象にしても十分に興味を持ってもらえるということがわかりました。今後は、アカデミックな背景を生かし参加者が科学の本質に触れることができるよう、これまでの展示をさらに発展させてゆくことが、次の目標となりそうです。

